中世のLeónおよびZamoraにおける −Ŏ̆CT−および−ACT−，−ECT−について

秦　　隆　　昌

拙論「中世のイベリア半島北部における−CT−，−(U)LT−について」(愛知県立大学外国語学部紀要，第3号)において，この音素連続の歴史的変化を調べるための資料をNavarra-Aragón，Castilla，およびLeónの各方言地域について整理し，Castillaにおいては，この音が半島のうちでいちばん早くtʃの段階に達していたことを示す表記が見られること，Navarra-Aragónについては，さいしょjtを示す表記が一般に使われ，それがのちにCastilla音のtʃを示す表記(ch)に置き換えられていったことを確めた。しかし，現在のLeón州中部，東部，及びZamora州に相当する地域においては，XIII世紀の文書にchの表記が普通に使われているものの，この表記が示すtʃが，Castillaからの外来音であるか，それともこの地域独自の音韻変化によって生じた土着音であるかという点については，結論がえられなかった。

本論では，この問題を中心に考察してみたいと思う。なお，ここで−CT−，−(U)LT−の特別のばあいである−Ŏ̆CT−及び−ACT−，−ECT−の音素連続をとくに取り上げたのは，−CT−，−(U)LT−を他の音の歴史的変化との関係において見るためである。

§1. −Ŏ̆CT−

Ŏ̆は現在Castillaでは，ある条件が伴うばあいを除いて，一般に二重母音〔wé〕に変化し，Galiciaでは単母音〔ó〕の形を保っている。Castillaでは，−Ŏ̆−にyodが後続するばあい，Ŏ̆は二重母音化しない。−CT−はそのyodの一種をふくむ音素連続であり，したがって−Ŏ̆CT−はCastillaでは〔wétʃ〕とはならないで〔ótʃ〕の形をとる。なお，Galiciaでは，−Ŏ̆CT−は〔ójt〕の形をとっている。Cast. *biscocho*, Gal. *biscoito* <BIS COŎ̆CTU ≪カステラ≫; Cast. *noche*, Gal. *noite* <NŎ̆CTE ≪夜≫; Cast. *ocho*, Gal. *oito* < Ŏ̆CTO ≪8≫

CastillaとGaliciaの間に挟まれているのがLeón方言地域であるが，そこには−Ŏ̆CT−のŎ̆が二重母音の形をとっている部分と単母音の形をとっている部分とがあり，又−CT−が〔jt〕になっている部分と〔tʃ〕になっている部分とがある。したがって，それらの組合わせでできる−Ŏ̆CT−の現在の形は同じ方言地域内でも均一ではない。

以下，その状況をもう少しくわしく調べてみることにする。(第2図参照) Asturias地方の北西部，Cantabria海岸のNavia河口のやや東の地点から南下して，León州西部を通り，Zamora州の西のわずかの部分を切り，Portugal領の北東部を通って，Zamora州南西部のPinilla de Fermoselle付近にいたる南北の線は，Galicia-Portugal語地域とLeón方言地域を隔てる境界線の一部をなしているが，これはまたŎ̆+yodのŎ̆が二重母音化する西の限界線にもなっている。同限界線はPinilla de Fermoselle附近で言語境界線と分かれて，向きを北東に転じ，Duero川が国境と重なっている部分を川の上流に向かって進み，さらに国境を離れたのちも，川に沿って東進し，やがて北々西に曲がり，Zamora州とLeón州の州境に達したのち北東に向かい，Asturias地方の東部のほとんどSantander州との境界に近い所で，ふたたびCantabria海岸に達する。この線で囲まれるじょうご形の地域内で

は，Ŏ＋yodのŎも，その他のŎもすべて二重母音化して〔wé〕，あるいは〔wó〕の形をとる。この地域の西側ではすべてのŎが二重母音化しない。またこの地域の東側，及び南側では，一般のŎは二重母音化するが，Ŏ＋yodのŎは二重母音化しない。

一方，〔jt〕：〔tʃ〕（＜－CT－，－(U) LT－）の境界線は，上に述べたすべてのŎが二重母音化するじょうご形の地域の内部を南北に通っている。すなわち，Asturias 地方の北部，Cantabria 海岸の町 Luarca の東から南下して，多少左右にくねりながら，Asturias，Leónを経て，Zamora 州北西部で国境に接し，国境沿いに Duero 河畔にいたる線である。

この二種の音韻境界線によって，León方言地域を中心としたイベリア半島北西部は4つの地域に区分される。－ŎCT－を含んでいる *noche* ＜ NŎCTE ≪夜≫を例にとって説明すると，西から順に次のようになる：

(1) 〔nójte〕の形をとる地域 ── Ŏは二重母音化せず，－CT－は〔jt〕の形をとる。
(2) 〔nwéjte〕または〔nwójte〕の形をとる地域 ── Ŏは二重母音化し，－CT－は〔jt〕の形をとる。
(3) 〔nwétʃe〕または〔nwótʃe〕の形をとる地域 ── Ŏは二重母音化し，－CT－は〔tʃ〕の形をとる。
(4) 〔nótʃe〕の形をとる地域 ── Ŏは二重母音化せず，－CT－は〔tʃ〕の形をとる。

以上が León方言地域における現在の－ŎCT－の地理的分布である。中世の文書に見られる－ŎCT－の表記は次のようである。

Oviedo（現在の Asturias 地方中部）
　── *ocho* ＜ ŎCTO ≪8≫（1262年，Alv.41[1]）
Cacabelos（現在の León州西部）
　── *oyto* ＜ ŎCTO（1280年，Sta. 98[2]），*noyte* ＜ NŎCTE ≪夜≫（1294年，Sta. 101）
Espinareda（同西部）
　── *oyto* ＜ ŎCTO（2例）（1283年，Sta. 100）
Bembibre（同西部）
　── *ocho* ＜ ŎCTO（1270年，Sta. 96）
León（同中部）
　── *vuecho* ＜ ŎCTO（1260年，Sta. 55），*ocho* ＜ ŎCTO（1291年，Sta. 71）
Eslonza（同中部）
　── *cuecho* ＜ CŎCTU ≪(人名)≫（1272年，Sta. 81）
Sahagún（同東部）
　── *ocho* ＜ ŎCTO（1278年，Sta. 61）
Moreruela（現在の Zamora 州中部）
　── *ocho* ＜ ŎCTO（3例）（1297年，および1313年，Anu. VI[3]）
Zamora（現在の Zamora 州）
　── *noche* ＜ NŎCTE（4例），*nueche* ＜ NŎCTE（2例）（1289年，Fuero de Zamora[4]）

全体に数が少いが，現在のLeón州中部，東部，およびZamora州に相当する地域に－ŎCT－のŎが二重母音化した例が現われていることが分かる。ところで，わたくしは従来，中世León方言の－CT－，－(U)LT－の本来の形が，Castillaと同じくtʃであり，jtではないという，ほぼ定説になっている考え方に疑問をもっていた。しかし－ŎCT－のばあいをよく吟味するならば，やはりtʃがLeón本来の形であって，外来形ではないという見方が正しいことを認めなければならないと思う。

この結論にいたった経過は次のようである：

Leónにおけるtʃが Castillaからの外来音であることを主張したE. Staaffはその著書Étude sur l'ancien dialecte léonais（p. 237）のなかで，*feycho* < FACTU ≪「する」の過去分詞≫，*peyche*，*peyge* <*PACTET ≪「支払う」の接続法現在3人称単数≫等の形を説明して次のようにいっている：「これらの形は恐らく二つの方言（すなわちCastilla方言とLeón方言）の混成（contamination）によって生じたものと考えるべきであろう。この方言（すなわちLeón方言）の本来の形は*yt*であったが，*ch*をもつCastilla方言の影響を受けたけっか*ych*に変形したわけである。（*feycho*＝*feyto*＋*fecho*）」これにたいしてM. PidalはOrígenes（§15. 6）の脚註）で反論している：「Staaffはこれらの形が両方言の混成 ── すなわちLeón本来の形 *peite*＋Castillaからの外来形 *peche* ── のけっか出来たものだと考えている。わたくしは*ch*がCastillaと同様，Leónにおいても本来の形であると考える」。そしてその理由を大略次のように述べている：「XIII世紀の中部Leónの文書では，普通の形である*ch*とともにいくつかの*ych*の形が現われている。この形は，この音の歴史的変化における古い段階であり，したがって，この地域においてCT＞*ch*の変化が独自に起ったことを示している。なぜなら，この*ych*のgradeはCastillaではずっと以前から非常にまれなものか，あるいはまったく見られない形となっており，それがLeónに移入されたとは考えられない。これにたいして，Leónでは今日でもなお，例えばÓrbigo河畔においてこの形が生きている」（Orígenes § 51, 3））。Staaffにたいするこの反論の根拠は，それだけではあまり十分とはいえないとわたくしは思う。というのは，Castillaの東に隣接するNavarraの文学作品[5]に *muychos* < MULTOS ≪多くの≫の表記が見られるが，上記のM. Pidalの説明にしたがえば，この*muychos*もNavarra本来の形と考えなければならないことになる。なぜなら，Castillaには*muycho*という形は見られないからである。しかし，Navarraでは－CT－，－(U)LT－の形が，本来はjtであり，XIII世紀ごろからしだいにCastilla音のtʃが滲透していったことが明らかである。したがってこの*muychos*の形は，その過渡期において本来形の*muytos*と外来形の*muchos*が混成を起したけっか生じたものと見るべきである。そこで(1) Castillaでは古くからjtʃの形がない，(2) Castillaに隣接する地域の中世の文書に*ych*の表記が見られる：という二つの前提からただちに，その隣接方言は本来の形としてtʃないしはjtʃの音をもっていたという結論はみちびきえない。

しかし－ŎCT－のばあいを考えると，Leónにおけるtʃの外来説はやはり認めがたい。－ŎCT－はLeónの中部，東部，およびZamoraの文書では，例えばNŎCTEを例にとると，*noche*または*nueche*の形で現われている。いまかりにLeón本来の形がjtであると仮定すれば，NŎCTEから導き出される形は**noyte*または**nueyte*である。**noyte*と*noche*が混成を起したばあい，**noyche*という形はできるかもしれないが，*nueche*という形はできない。また**nueyte*と*noche*では語形の隔りが大きく，恐らくこの二つが混成を起すことは

ないと思われる。混成が起らなかったとすれば，本来の形が jt であるという根拠はなくなり，León本来の形は tʃ であるという結論に達する。こうしてLeónにおける tʃ の外来説は否定される。

León方言地域の東部では，現在－ŌCT－は Castilla 音の影響を受けて〔ótʃ〕になっているが，XIII世紀ころはまだ wétʃ が普通の形であったと思われる。文書に見られる－*och*－の表記は Castilla からの外来形，ないしは latinism によって二重母音を表記しない形が残されたものであろう。その地域本来の形とそれ以外の形との混用は，東の Navarra-Aragón でも見られる。しかもここでは二種の表記のちがいが著しく，両者は区別しやすい。すなわち－ŌCT－にたいして当てている表記は－*ueyt*－(*nueyt*, *nueyte*, *nuyt* < NŌCTE, etc.[6])と－*och*－(*noch*, *noche* < NŌCTE, *ocho* < ŌCTO, etc.[7]) である。前者はŌが二重母音化し，－CT－が古い段階の jt に留っていて，Castilla に見られない形を示しているのにたいし，後者はまったく Castilla 形そのままである。これほど顕著なちがいはないが，León中部，東部，および Zamora における－*uech*－と－*och*－はこれと同じ関係にあり，それぞれ Navarra-Aragón の－*ueyt*－，－*och*－に相当している。

§ 2. －ACT－，－ECT－

XIII世紀の León西部 Cacabelos，Ponferrada，同南部 Villarrabines，および Zamora の文書では，－CT－，－(U)LT－の特別のばあいである－ACT－，－ECT－に由来する音の表記として，－*ech*－のほかに－*eych*－が，少数ではあるが，使われている[8]。以下この特別の形を中心に検討してみたいと思う。

まず－*eych*－を使用している文書は，その使用条件の異なる二つの地域に分けて考えなければならない。その一つは Cacabelos のばあいで，ここでは－CT－，－(U)LT－は大部分，－*ch*－ではなく，－*yt*－で表記されており，それにまじってわずかに－*ych*－，－*ch*－の表記が使われている。また，この地域は現在〔jt〕の音を残している。これらの条件を綜合すると，XIII 世紀においても，この地域では jt の音が使われていたことが明らかである。まれに現われる－*ych*－，－*ch*－の表記は，一種の外来形として，たんに表記の上で使われた形であり，当時のこの地域の音を表わすものではないと考えられる。もう一つは Ponferrada，Villarrabines，および Zamora のばあいである。これらの地域では現在〔tʃ〕(<－CT－，－(U)LT－)が聞かれ，また XIII 世紀の文書では，多くの－*ch*－にまじって，少数の－*eych*－が使われている。§ 1 で検討したことにより，この ejtʃ が ejt と etʃ の混成によって生じた形であるとする説(*feyto* + *fecho* = *feycho*)は否定され，この地域の－ΘT－，－(U)LT－は独自の音韻変化によって破擦音 tʃ を作り出していたことが確められているので，この－*eych*－の表記は，－ACT－，－ECT－が ejt を経て etʃ にいたる中間の段階を示していると考えてよい。

ところで，XIII世紀の文書においてとくに－ACT－，－ECT－のばあいにのみ－*ych*－の表記が見られるのはまったくの偶然であろうか。例えば Fuero de Zamora では－CT－，－(U)LT－の例のうち，じつに 94％が－ACT－，－ECT－のばあいである。そしてこの 94％のうちのわずかの部分(6.3％，11例)が－*eych*－である。したがってこの割合でいくと，－ACT－，－ECT－以外で－*ych*－の現われる回数(期待値)は，計算上は約0.7回になる。このような割合でしか－*ych*－の表記が現われないのであるから，－ACT－，－ECT－以外のばあいに－*ych*－の表記が偶然見られないとしても，それはふしぎではない。

しかし次の点を考慮すると，やはりejtʃのばあいは，その他の母音＋jtʃのばあいに比べて，jが比較的長く保存される一般的な傾向があるように思われる。まず，現在のLeón方言地域において，−ACT−，−ECT−に由来する〔ejtʃ〕の形はLeón州のCurueña(*lleiche* < LACTE ≪牛乳≫)，Zamora州のVillarino tras la Sierra (*dereicha* < DĪRĒCTA ≪右側≫，*leichuga* < LACTŪCA ≪ちしゃ≫) 等で聞かれるという報告がなされているが，−ACT−，−ECT−以外の−ŌCT−，−UCT−，−ULT−等に由来する*〔ojtʃ〕，*〔ujtʃ〕の形は報告されていない[9]。またこれらの音素連続によく似ている−OX−，−UX−は，León方言地域の西側，およびGalicia語地域では，現在それぞれ〔oʃ〕(oks>ojs>ojʃ>oʃ)，〔uʃ〕(uks>ujs>ujʃ>uʃ) の形をとっているが，−AX−はそれより一つ古い段階に留っていて，現在でもjを保存している。cf. *luxo* (*x*は〔ʃ〕) < LŪXU ≪ぜいたく≫，*coxo* < Vulgar Lat. CŎXU ≪びっこの≫，*fluxo* < FLŪXU ≪流動≫，*bruxa* <*BRŪXA ≪魔女≫；*eixo* < ĀXE ≪軸≫，*deixar* < LAXĀRE ≪残す≫，*madeixa* < MATAXA ≪約束≫，*teixo* < TAXU ≪(植) いちい≫。以上の事実は，母音＋j＋ある種の口蓋子音という音連続では，母音が前舌音のばあいには保存されやすく，後舌音のばあいには保存されにくいという，この地域の一般的な傾向を示しているようである。

そこでLeón中部，東部，およびZamoraにおける−CT−，−(U)LT−> tʃの変化には次の順序が考えられる：

(1) −CT−，−(U)LT−> jt > jtʃ の変化が起る。

(2) この段階にきて，i＋jtʃ のばあいはjがiに吸収され，itʃ となる[10]。

(3) o＋jtʃ，u＋jtʃ のばあいはe＋jtʃ より先にjを失って，otʃ，utʃ となる。

(4) e＋jtʃ の形が残されている段階で，ej (<A＋yod，E＋yod) > e の変化が起りejtʃ が etʃ となる。

ej > e の変化は，イベリア半島ではCataluña，Navarra−Aragón，Castilla，およびLeón方言地域東部で起っているが，この変化と−ACT−，−ECT−の変化との時間的な関係は地域によって異なっている。M. Pidalが指摘しているように[11]，−ACT−，−ECT−> (1) ejt >(2) ejtʃ >(3) etʃ の変化の過程に，(1)から(2)に移る以前にej > e の変化が起っていたならば，ejtのtは破擦音化せず，etの形になったはずである。その形の実例は，現在のAragón北東部の山岳地帯に残されている。この地域ではejtの段階でej > e の変化が起ったわけである。León方言地域の東部ではej > e の変化が起っているが，そのことと−CT−，−(U)LT−が独自の音韻変化によって破擦音tʃを作り出していることとを合わせ考えると，この地域ではejt > ejtʃ の変化が先に起り，次にej > e の変化が起ったと見なければならない。León方言地域の西部とGalicia語地域では，−ACT−，−ECT−の変化がejtの段階でとまったこと，ej > e の変化が起らなかったことの二つの条件が重なって，現在でも〔ejt〕の形を残している。このようにej > e の変化は−ACT−，−ECT−の変化の時期を明らかにするための一つの目安として考えることができる。

以下，−ACT−，−ECT−とA＋yod，E＋yodの変化を比較してみよう。まず，León中部および東部の地域(León，Eslonza，Sahagúnをふくむ)については，M. Pidalが一つの統計を示している[12]。それはA＋yod，E＋yodのうちもっとも用例の多い−ĀRIUのばあいについてであるが，次の数字はその形がX世紀からXII世紀にかけてどのように変化していったかをよく物語っている。

	éjro	éro
X 世紀前半	57 %	43 %
X 世紀後半	35 %	65 %
XI 世紀前半	15 %	85 %
XI 世紀後半	14 %	86 %
XII 世紀前半	12 %	88 %

この統計を見てわかることとは，この地域ではX世紀より前に－ACT－，－ECT－が ejtʃ の段階に達していたということである。なぜなら，もしejt の段階に留っていたならば，Aragón北東部と同じようにej＞e の変化をうけて，ejt はet に変化したはずである。ところで，ejtʃ（＜－ACT－，－ECT－）の段階を示す表記はこの地域の文書には見られない。XI～XII世紀の文書では，Galicia語の影響により使用されたと見られる－*eit*－ と，この地域本来の音を示していたと見られる－*ecc*－，－*eg*－（cc，g ともに tʃ を示す）以外の形は残されていない。[13] そしてまた，XIII 世紀の文書ではすべてが－*ech*－で表記されている。したがって，ejtʃ＞etʃ の変化の時期を－ACT－，－ECT－の表記自身から明らかにすることはできない。しかし，－ĀRIU－のばあいとの比較によって，それをある程度推定することはできる。すなわち，XIII 世紀よりあまり遠くない過去にこの変化は起ったはずである。

次にLeón方言地域南部のZamora について見よう。M. Pidal の調べたXI世紀後半の文書では，－ĀRIUの表記として－*eiro* 3例，－*ero* 4例が用いられており，[14] éjro の残存率は約43％となっている。このパーセンテージはわずかの例から割り出されたもので，正確さを欠いているが，少くとも，この地域では León 中部，東部よりは j の消失が遅れていたことを示している。わたくしが見たXIII 世紀の文書でも éjro の例は少数ながら残されている。*cavaleyro*＜CABALLĀRIU ≪騎士≫（Moreruela 1297年，Anu. VI），*obreyro*＜OPERĀRIU ≪労働者≫（Fuero de Zamora 1289年），etc. 一方，－ACT－，－ECT－については，XIII 世紀の文書に次のような例が残されている：*feicho*，*feycho*＜FACTU ≪「する」の過去分詞≫（Moreruela 1238年，Alv. 75；Manganeses 1247年，Sta. 88），*peiche*，*peyche*＜*PACTET ≪「支払う」の接続法現在3人称単数≫（Moreruela 1238年，Alv. 75；Fuero de Zamora 1289年）。Fuero de Zamora について統計をとってみると，－ACT－，－ECT－における ejtʃ の残存率は6.3％，－ĀRIU における éjro の残存率は5.3％と，たがいにほぼ近い数字を示している。このような状況から見て，Zamora ではXIII 世紀ころ ejtʃ＞etʃ の変化がまだ進行しつつあったと見ることができる。

Ponferrada 及び Villarrabines については，資料が少く，一般的な傾向を見ることができないが，León，Eslonza，Sahagún を中心とする León 中部，東部地域の周辺部にあり，－ACT－，－ECT－の変化は，Zamora と同じように，比較的遅くまで ejtʃ の段階をのこしていたのではないかと思われる。

以上検討したことは次の2点に要約される。

1. León中部，東部，及び Zamora における tʃ（＜－CT－，－(U)LT－）が，Castilla からの外来音ではなく，この地域本来の音であることは，他の地域に見られない－*uech*－（＜－ŎCT－）の表記の存在によってそれを裏付けることができる。
2. －ACT－，－ECT－は León 中部および東部では，XIII 世紀以前に ejtʃ＞etʃ の変化が終っているが，Zamora ではXIII 世紀でもまだこの変化が進行中である。

〔註〕

1) Manuel Alvar : Textos hispánicos dialectales, Antología histórica, RFE — Anejo LXXIII, Madrid, 1960の文書の番号。

2) Erik Staaff : Étude sur l'ancien dialecte léonais d'après des chartes du XIIIe siècle, Uppsala, 1907の文書の番号。

3) Centro de Estudios Históricos : Anuario de historia del derecho español, Tomo VI, Madrid, 1929.

4) Américo Castro & Federico de Onís : Fueros leoneses de Zamora, Salamanca, Ledesma y Alba de Tormes, I Textos, Madrid, 1916 — Fuero de Zamoraの資料として, Q, E, Sの3種のテキストのうち,もっとも原形に近いとされているQを用いた。

5) Alv. 148に出ている Poema de Roncesvalles (XIII世紀) の38行目。

6) *nueyt* — Alv. 188の3行目。同207の43行目(以上 Aragón).
nueyte — Alv. 207の46行目 (Aragón).
nuyt — Alv. 149の27行目。同150の3行目(以上 Navarra), etc.

7) *noch* — Alv. 190の6, 32, 40行目(Aragón).
noche — Alv. 149の22行目, 同151の4行目, 同158の14行目(以上Navarra).
ocho — Alv. 207の56行目(Aragón), etc.

8) Cacabelos — *peyche* <*PACTET (Sta. 94, 1例).
Ponferrada — *peyge* <*PACTET (Sta. 92, 1例).
Villarrabines — *feycho* <FACTU (Sta. 89, 3例), *peychar* <*PACTĀRE (Sta. 89, 1例).
Moreruela (Zamora) — *feicho* <FACTU (Alv. 75, 1例), *peiche* <*PACTET (Alv. 75, 7例).
Manganeses (Zamora) — *feycho* <FACTU (Sta. 88, 1例).
Fuero de Zamora — *peiche*, *peyche* <*PACTET (9例), *peycho* <PACTU ≪年貢≫(2例).

9) José María Bazの報告によれば, Aliste (Zamora州南西部 Villarino tras la Sierra付近の地域)では次のような形が現在使われている:
(−ECT−, −ĬCT−) — *teicho* <TĒCTU ≪屋根≫, *dereicho* <DĪRĒCTU ≪右の≫, *estreicho* <STRĬCTU ≪狭い≫.
(−ŎCT−) — *deciocho* (*ocho* <ŎCTO) ≪18≫.

10) i + jt の段階で, j が i に吸収され, *−it−* の形が作られたばあいもある。cf. *dito* <DĬCTU ≪「云う」の過去分詞≫(Moreruela, Anu. VI), *sobredito* <SUPER-DĬCTU ≪上述の≫(Benavente, Sta. 99).

11) Manual de Gramática histórica española, § 9の2).

12) Orígenes § 12の2).

13) Orígenes § 51の3).

14) Orígenes § 12の2).

B I B L I O G R A F I A

Alvarez, Guzmán : El habla de Babia y Laciana, RFE---Anejo XLIX, Madrid, 1949.

Bolaño e Isla, Amancio : Manual de historia de la lengua española, México, 1959.

Catalán, Diego & Galmés, Alvaro : La diptongación en leonés, Archivum, IV, 1954, pp. 87 - 174.

Consejo Superior de Investigaciones Científicas : Atlas lingüístico de la Península Ibérica I, Fonética I, Madrid, 1962.

Corominas, Juan : Diccionario crítico etimológico de la lengua castellana, Bern, 1954.

----- : Breve diccionario etimológico de la lengua castellana, Madrid, 1961.

García de Diego, Vicente : Diccionario etimológico español e hispánico, Madrid, 1954.

----- : Gramática histórica española, Madrid, 1951.

----- : Elementos de gramática histórica gallega, Burgos, 1906.

Hanssen, Friedrich : Spanische Grammatik auf Historischer Grundlage, Halle a. S., 1910.

Joaquim Nunes, José : Compêndio de gramática histórica portuguesa, 6a ed., Lisboa, 1960.

Krüger, Fritz : El léxico rural del Noroeste Ibérico (traducción de Emilio Lorenzo y Ciado), RFE ---Anejo XXXVI, Madrid, 1947.

María Baz, José : El habla de la tierra de Aliste, RFE ---Anejo LXXXII, Madrid, 1967.

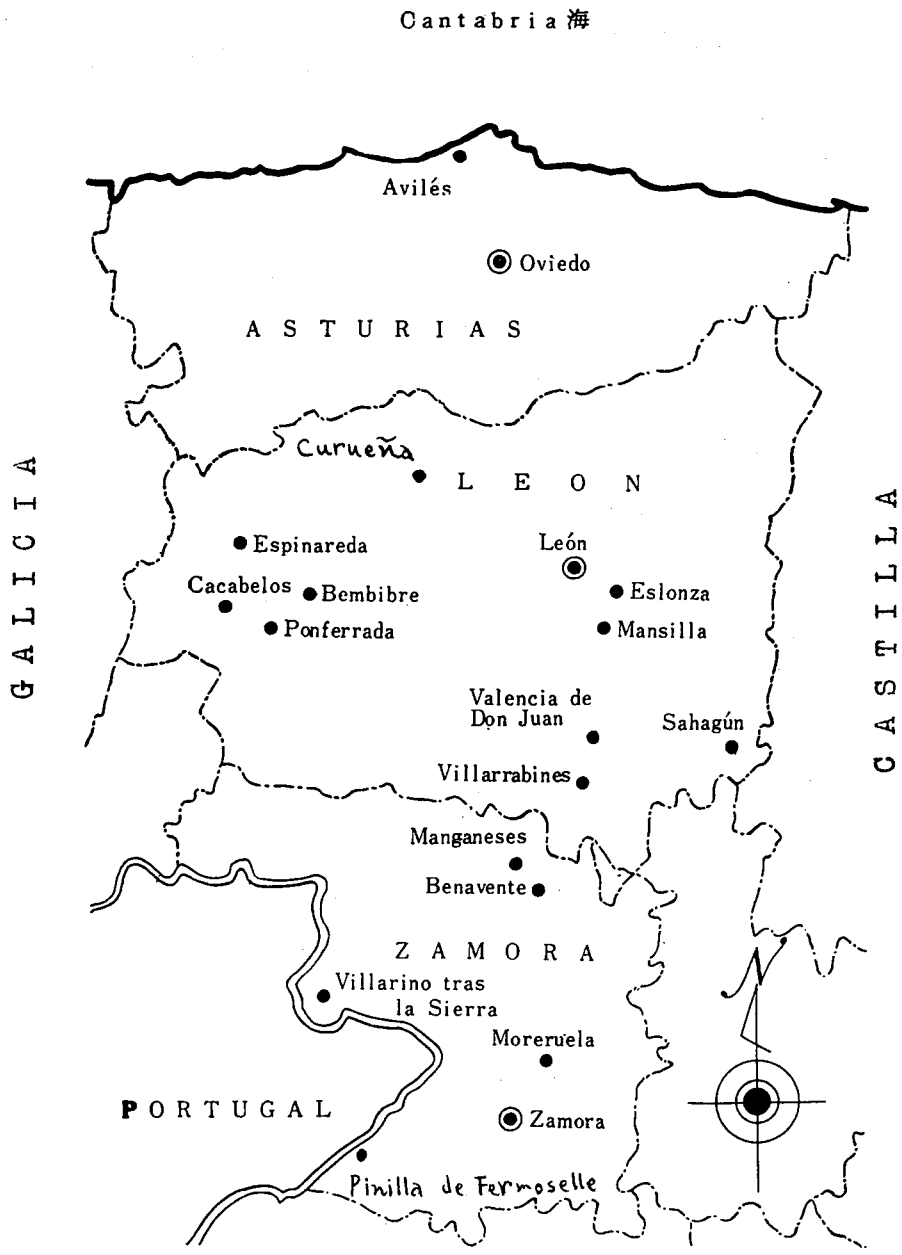
Menéndez Pidal, Ramón : El dialecto leonés, RABM, X, 1906. pp.128 - 172.

Rodriguez Gonzales, Eladio : Diccionario enciclopédico gallego-castellano, Vigo, 1958, 1960 y 1961 (3 tomos).

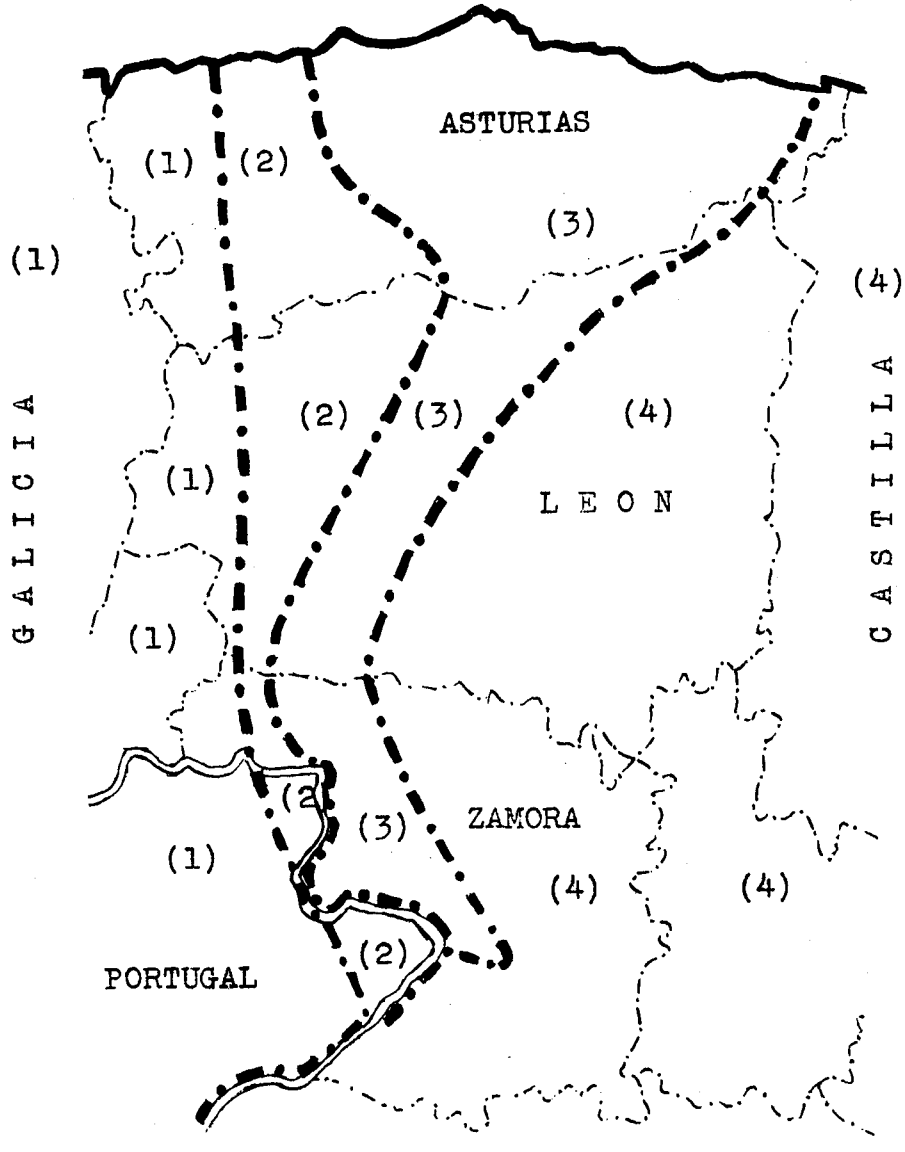
Romera-Navarro, Miguel : Registro de lexicografía hispánica, Madrid, 1951.

Zamora Vicente, Alonso : Dialectología española, Madrid, 1960.

第１図　León 方言地域の地名



第２図　León 方言地域の NŎCTE



━━━	海　岸　線	(1)	〔nójte〕の地域
─·─·─	州　　境	(2)	〔nwéjte〕または〔nwójte〕の地域
━·━·━	音韻境界線	(3)	〔nwétʃe〕または〔nwótʃe〕の地域
═══	国　　境	(4)	〔nótʃe〕の地域